
桜と二人

柗燕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜と二人

【Nコード】

N3934E

【作者名】

榊燕

【あらすじ】

桜咲き乱れる小学校の入学式、二人の少女は出逢った。これからの長い間ずっとあり続けるその関係。物語は高校から始まる。依存する二人が繰り広げるほのぼの学園物語。

プロローグ〜出会い〜第一章〜始まる二人〜

・プロローグ〜出会い〜

桜咲き乱れる、四月の入学式。

出逢う事のないはずの二人が、運命に導かれてか、ただの偶然なのかこの小学校で、出逢った。

神 鞘という孤児の少女と 深淵途 爛という、友達のいな
い少女。

・第一章〜始まる二人〜

「はあい！先生はみどり先生です、皆も自己紹介をしましょ〜」
そんな明るい声から、私の新しい学園生活が始まった。

一年三組、これが私のクラス。

「出席番号、五番、神鞘と申します、趣味は読書、特技は家事
です、よろしくお願い致しますね」

なんとか、嘸まずに、しっかりと云えた。

安心してほつとしてしていると、とても緊張して、まともに話せて
いない自己紹介が聞こえてきた。

私は思わず、その自己紹介をしている少女を見た。

「は…ちが、し……しん、えん…じ、ら、ん…です……よ、よ、
よろ…よろし、くお、ねがい、し、しま、す」

その子は、とても綺麗な金髪と深い青色の瞳をしていた。

金髪の子をみるのは初めてじゃないのに思わず見惚れてしまっ
たくらいに可愛い子。

あまりの緊張からか自己紹介が終わって、椅子に座った瞬間、
その青色の瞳からぼろぼろと涙がこぼれ落ちる。

周りの子は自分の事で一生懸命みたいで、誰も気づいていない。

席は私の隣、どうするか考える前に、ハンカチで涙を拭いてあげながら、声をかけてしまっていた。

「大丈夫？」

その子は、突然声をかけられて吃驚したように私を見つめる。私自身、声をかけたことに驚いていたが、私を見つめるその瞳から目をはなすことが出来なかった。

そんな事やっつてる内に全員の自己紹介が終わっていた。

「じゃ〜自己紹介も終わった所で、これからいろいろやったりするのに、ほとんどが二人ペアになって動くようになるから、その相手を決めたいと思います」

みどり先生はそう言うと、クジで決めるから皆前に出てきてと言った。

私も席を立って前に行こうとしたとき、服の裾が軽く握られた。隣のあの子だ。

「あつ……う、ごめんなさい……」

そう言っつて、すぐ手をはなしてしまっただけ、私は何故かとても嬉しかった。

「はい、一緒に行こう」

私はそう言っつて、今度は自分からその子の手をとって歩き出した。

その子は、どうしていいか解らないと言っつた感じだったけど、素直についてきてくれた。

先生の所に行くくと、残っつてるのは私達だけみたいで、早く名前をかいて箱の中に紙を入れてと紙と鉛筆を渡された。

私は思わず、先生こう言っつていた。

「先生私……」

深淵迹 爛これが、その子の名前。

ペア決めの時から、爛ちゃんはずっと私の服の裾を握ったまま
で私から離れようとしなない。

「先生私、この子と一緒にがいいです」

先生は少し驚いた顔をしたけど、すぐに嬉しそうに、いいわよ
って言うてくれた。

その時爛ちゃんが初めて顔を上げて私をしっかりと見てくれた。
そのあと、一瞬だったけど、笑ってくれた、私はその笑顔がとて
も可愛くて、ずっと見ていたいと思った。

この時から、私と爛ちゃんの二人の世界、時間が動きだしたん
だと、私はそう想い続けている。

第二章 近づくと二人

驚いた。

何が驚いたかと言うと、テレビでしか見たことのない、三メートル以上ある真っ黒なリムジン、それに当たり前のように入り込む、爛ちゃん。

本当に驚いた。

爛ちゃんは、不思議そうに、呆然としている私を見ていた。

「ど、どうしたの？」

動かない私に、今にも泣きそうな顔で、脅えたように聞いてきた。

私はその爛ちゃんを見た瞬間、ごめんね、何でもないよ、と言って恐る恐るその車に乗り込んだ。

これだけではなかった。

爛ちゃんは、世間で言うお金持ちだった。

家に帰ってお義母さんに話すと、爛ちゃんの家は世界でも有名な家柄だと言う。

「私見たいな子だったら、仲良くしたらいけないの？」

私がそう聞くと、お義母さんは、それは違うと言ってくれた。

「確かにこの世の中、偉い人、凄い人沢山いますよ、ですが仲良くしたり、お友達になつたりするのはそんなものは関係ないの、鞘は爛ちゃんがお金持ちだから友達になりたい訳じゃないでしょう、確かに周りの人はいろいろと心ない事を沢山言ってくるでしょうが、鞘：あなたが本当に仲良くしたいと想うなら、たとえ爛ちゃん本人に否定されても、頑張りなさい、全ては鞘次第よ」

私はこの時の、お義母さんの言葉があつたから周りの人から何を言われても頑張つてこれた。

爛ちゃんと、友達になりたい、仲良くしたい、どうしてこんな

にこんな想いが浮かんで来るかは、私にも解らない、それでもこの
想いだけは、決していつまでも無くなることはなかった。

爛ちゃんとその家族の人達も好きな人だったからというのも頑張
ってこれた理由の一つ。

自分達の身分を誇示したりもせず、私を普通に爛ちゃんの友達
として、よく家に招いてくれた。

そんな周りの人達に守られ、私達は、今もずっと二人で仲良く
毎日を過ごしていく、変化があったのは、高校に入学する話しが登
った時だった。

第三章　手を取り合う二人

「私は近くの公立高校に行く予定よ」

私のこの発言から問題は発生した。

「私は鞘と同じ学校に行きます」

爛は進路相談の時先生と親にこう言ったらしい。

流石のご両親も大慌てだ。

爛の頑固さは並みじゃない。

困り果てたご両親が、なんとか説得してくれとつい昨日私の家を訪ねて来た。

そして今私は爛の部屋に来ている。

「鞘が来てくれるなんて珍しいね、嬉しいよ」

爛はそう言っただけで私の隣に座っている。

私はどう説得したものかと、考えていると爛のほうからその事に触れてきた。

「鞘は家の前のあそこに行くんでしょ、私も同じ所に行くから、また一緒のクラスになれるといいね」

とても嬉しそうに話し出す。

切り出しにくいけど、いつまでも迷っても仕方ないと、思い切り直球で切り出した。

「その事なんだけど、爛は桜華学園にもともと進む予定だったのでしょ、そちらの学園に進んだ方が絶対いいと思うのよ、離ればなれになるのは寂しいけれど、将来の事を考えると…ね？」

「嫌」

「あのね……」

「絶対嫌」

「……」

私が困ってどうしようか黙ると慌ててこう言ってきた。

「鞞の言うことなら何でも言うこと聞きたいけどこれだけは絶対聞けない、私はどんなことをしても鞞から離れたくない」
泣きそうな顔でジィツと私を見つめてくる。

「っっ」

思わず抱き締めてしまった。

爛も顔を胸に埋めてギュウツト私の服を握りしめて離さない。

私は心の中で爛のご両親に謝った。

私には説得無理でした、だって本当は私だって爛とは離れたくないから……。

「だからと言って、何でこんな状態になってるのかしら」

私は今桜華学園の中に立ち尽くしていた、桜華学園の制服を身に付けて。

周りには私と同じ新入生が楽しそうな笑顔や少し緊張した表情で通り過ぎていく。

そして私の隣には、爛がこれまた嬉しそうに凄い笑顔で立っていた。

「本当になんでこうなったのかしら」

第四章〜入学式〜

「鞘さん、今家族で誰が一番頭がいいかちよつとしたテストをしていたの、ついでに鞘さんもやってみて」

私が爛の説得に失敗して、次の日その事で謝りに爛の家に入った瞬間、爛のお母様に突然そう言われた。

「あ、あの、昨日は…」

「ああ、気にしないで、家族の事だったのに鞘さんに頼んだ私達の方がいけなかったのだから…それでも気になるなら、このテストやってみて…あ、あのね今の所私が一番下だったので、少し慌ててしまったみたいねごめんなさい」

何故か慌てたように、何かをごまかすように、そう捲し立てる。ただその瞳をみると、このテストをやらないと帰さないといった感じの雰囲気か漂っていた。

私が解りましたと言うと、とても嬉しそうに準備を始めた。

「手を抜いたりしては駄目よ」

どこか鬼気迫る感じでそう言われ、思わず頷く事しか出来なかった。

この時、確かに何か怪しいと思っていたのに、説得出来なかった申し訳なさと、その勢いのせいとか、順位が低くて悔しいんだなあ、少し子供っぽい所があるんだなあとしか思わなかった。

今から考えると私はどれだけ馬鹿だったんだろうと思う。

爛のお母様がそんな事で剥きになるはずもなければ、その受けたテストも高校の入試問題と似てた所もいくらでも気付く要素があったのに、気付かなかったのだから、いや、考えもしなかったのだから…爛の説得が無理なら私を攻めて来ると言うことに。

「新入生代表、榊鞘」

「はい」

私はそうして今ステージの上にいる。

その受けたテストはこの桜華学園の入学テストだった。まかり間違って、一番という成績までとってしまった。

「無理です、私にはそんな学園行けるだけの力はありません」
テストを受けて一週間後、爛とそのお母様が家にきた、合格届けとともに。

「ご存知だと思われませんが…」
「鞘さんが気にしていることは解ります、まず第一に費用の問題、これは鞘さんが特待生に選ばれていますので、全てただになります、一番気にしていることはこの家のことだと思えます、これに関しては理事長先生にお願いするしかなくなってしまうのですが、さ…」

「深淵迦さん、判っています、元々鞘が近くの高校に行くこと決めたと聞いた時、情けなくて仕方なかったんです、鞘の力であればもっと上を目指すことも出来るのに、背中を押してあげることも出来なかったのですから、ですのでこんないいお話があるなら、私達は全力で後押しさせていただきます」

お義母さんはとても嬉しそうにそう言った。

「で、でも、私が今…」

「鞘：確かに、今までいろいろと貴女の助けがあったおかげでこの家は助かっています、自分のほしいものも買わずアルバイトのお金を全額入れてくれたことも、子供達の面倒をみてくれたことも、鞘がいなくなれば、きっと大変になると思います」

「それならっ!」

「でも、今まで私達の事を一番に考えてくれたのだから、これからはせめて自分の為に頑張ってほしいの、散々助けてもらって今更なのだけどね」

「お義母さん…」

「何より、少し位はお義母さんらしいこともさせてほしいの」

私は場の雰囲気にも飲まれていたと今だから思う。

涙を流して抱きついていて。

そして落ち着いて考えて、その時のやり取りを思うと、全て打ち合わせ通りだった事に気付いてしまったのだから。

確かに、お義母さんの気持ちは本当だと思っけど、騙された感じがして少し悔しかった。

「以上をもって答辞とさせていただきます、新入生代表、榊」
自分の席に戻って、誰にも気付かれないようにため息をついた。

まあ、私もなんだかんだ言っても実際凄く嬉しい想いもあるし、隣には爛もいるし、頑張っで行こうと、改めて決意した。

第五章 生徒会、百合会

この桜華学園には変わった制度がある。各学年にそれぞれ生徒会があるのだ。

一年生、生徒会またの名を百合会。

二年生、生徒会またの名を黒百合会。

三年生、生徒会またの名を白百合会。

他にもいろいろ変わった所があるけど、今関係していることが、まさにこの生徒会のことなのだ。

爛の発言から、私の意図とは関係なく、生徒会会長に立候補することになってしまった。

「鞘が会長で私が副会長になります」

入学式が終わり、自分達のクラスについて、ホームルームで各々の自己紹介が終わると担任の先生が一年生の間で生徒会を決めないと行けませんので立候補する人はいませんか、と言い出した。そして爛がそう言ったのだ。

「爛、私は…」

「はい、榊さんが会長で深淵巡さんが副会長に立候補ね」

私が否定する前に先生がいそいそと黒板に書き始める。

「先生！私はやる気ありません」

ここでやっと否定をしたのだが、先生は可哀想な子を見るように、小さく首をふった。

「一度決めてしまうと変更は出来ないの、ごめんなさいね」
絶句。

そうか、この学園では爛の発言力は絶対に近いものがあるんだった。

学園長は爛のお父様、二年、三年の生徒会は爛の御姉様二人。

そして学園に通う父母達を纏めているのが、爛のお母様。

そして、皆が皆、未っ子の爛を溺愛している。

学園の教師達も、生徒達のほとんどもその事を知っているのだ。爛はその事が判っている、きつと入学が決まった時から決めていたんだろう、私はやられた、と思いながら、ため息をついた。

「爛さん、こういう時は相談というか、私に許可をとってからやるのが普通じゃないのかしら？」

私はニツコリと笑いながら爛に詰め寄る。

「えっと、なんていうか……ごめんなさい、許して！」

爛はひきつった笑顔で後退りながら謝ってきた。

「あら、爛さん謝るようなら、初めからやらない方がよろしいのでは御座いませんか？」

流石に私も少し怒っていた、そう簡単に許してなんてあげない。

「あのあの、あ……」

「……………」

「うっ、ご、ご免なさい！ご免なさい！」

とうとう泣き出してしまった。

強がっていても、すぐ泣く癖はなかなか治らない。

「……………もう、今度からこんなことしないでよ」

ため息をついて、抱き寄せた。

爛に甘いのは私もみたい。

泣いてる姿を見ると、それ以上怒る気がなくなってしまうのだから。

そんなこんなで、結局生徒会会長に立候補することになってしまったのだ。

やるからには頑張ろうと、気合いを入れたのは良かったけど、会長と副会長の立候補が私達しかいなかったので、何をするでもなくそのまんま決まってしまった。

元々、一年生は入学したばかりで誰々がいいと分かる人が少な

い為立候補者が多い場合を除いて、選挙もなく決まってしまうらしい。

二年生からはすっかりとした選挙があるらしいけど、大体、三年間同じ人が会長、副会長をやることが多いらしい。

実績を残せば、と言うことだろうけど。

問題は会計と書記の立候補がいなかったことだ。

爛が副会長になったことで他の人達が怯えてしまっているからだろう。

まあ私みたいな誰とも知れない人の下につきたくないっていうのも多々あると思うけど。

「困ったわね、どうしましょうか」

と先生方は言っているものの、爛のことが大きいのだろう、無理に進めるようなことを一切しなかった。

「深淵迺さんの御姉様達も一年生の時は二人だけで、どうしても人手が必要なときだけ手伝いを入れるといった感じでやっていたので申し訳ないのだけど、一年生の間は二人だけをお願いできないかしら」

爛がない、私一人の時に先生がそう言ってきた。

「ご免なさいね、よろしくお願いね、あ、あと、深淵迺さんにも伝えておいてね、それじゃ先生用事があるから、本当にお願いな」

私が何も言う前にそそくさと逃げるように去っていった。

あまりにも爛に怯え過ぎではないだろうか。

そう思えるのは、やっぱり私が爛と仲がいいからだだろうか。

こうして二人だけの生徒会、百合会が生まれた。

「大丈夫、大丈夫なんとななるし、二年になるとときにはファンの子が絶対できるから、頑張れ」

爛の御姉様二人の言葉。

それもそれでどうなんだろう。

第六章 桜華祭

会長となつてから、二ヶ月。

大きな仕事もなく、簡単な雑務と仕事を覚えるだけの日々。

どうにか仕事にも慣れてきたころ、各学年の生徒会が集められた。

「それでは、桜華祭についての話し合いを始めたいと思います」
爛の御姉様で三年生の生徒会会長がそう言って話し合いが始まった。

「鞘と爛は解らないと思うから、まずは話しを聞いて、どういったものかを理解して、もちろん何か気になる事や意見があれば、どんどん発言してね」

私達は解りました、ありがとうございます、と言って話に耳を傾ける。

話しを聞いていると、まず規模の大きさに驚いた。

そして、生徒会の力、権限の大きさに。

教師に関して許可をとる必要もなく、生徒会が許可をだせば教師は口を出せなくなるくらい。

意外と長い時間の話しあいになった。

と言つても、殆んどが、爛の御姉様達二人しか発言せず、他の人達は頷くだけだった。

「そうだ、一年生の生徒会の出し物はメイド喫茶にしましょう」
各学年の生徒会の出し物を話し合つてる時、突然二年生の爛の御姉様がそんなことを言い出した。

「まあ！いいわねそうしましょう！」

周りの人達もいいですね、やら、流石会長等と騒ぎ出す。

あまりに突然で反応が遅れてしまった。

ほぼ決まりかけた時、やっと私も正気を取り戻して、キツパリと言いつつ切った。

「嫌です、お断り致します」

この発言で慌てたのが、周りの役員達。

馬鹿だとか、怖いもの知らずとか、頭が弱いんじゃないのかしらとか、いろいろと混乱したざわめき起きた。

「まだ、二年生の方々も三年生の方々も出店するものをお決めてないのですから、お二人がおやりになればよろしいのでは？」

そんな周りの声をむしして、そういいはなった。

周りの人達は頭を抱えて机につつぶくしていた。

「……あつははは、相変わらず、容赦ないねえ、敵にまわった人にたいして、大丈夫、大丈夫、冗談だよ、鞘を敵にまわすきなんてないから、そんな怒らないで」

とても楽しそうに笑いながら、そう言ってきた。

全く、油断も隙もない、あわよくば本気で押しきろうとしてたくせに。

「そうでしたか、申し訳ございません、つい熱くなってしまい、先輩方にあのような口を聞いてしまって」

そんな事は一切言わず、素直に謝っておいた。

「じゃ……」

私の謝罪を聞いた瞬間良いことを思い付いたといった表情が三年生の爛の御姉様に浮かんだ。

「嫌です」

まあ何を思い付いて、何を言おうとしたかが解ったので、全て言う前に断った、ニツコリと笑いながら。

「あー了解、もう言わないから怒らないで」

頭をかきながらやっぱり駄目かあといいながら、やっと諦めてくれた。

「じゃあ、ひとまず今週中に各クラスと自分達のやる出し物は決めておいてね、それじゃーこれで解散くお疲れ様」

爛の御姉様二人はそう言って、立ち去ろうとする。

「えっ！今まで話し合ってた議題はどうするんですか？」

思わずそう聞くと、本当はもう決まってると言いだした。

「鞄と爛のメイド服が見たかったから、それだけの為に開いた会だもの、失敗したから終わり」

さらつとそんなことを言いながら、部屋を出ていった。

呆然としていると、周りを囲まれていた。

何事かと見回すと。

「あなた凄いわね！」

等と、何故か尊敬されたり誉められたりと、意味が解らなかつた。

そんな騒ぎの中、最初から最後まで爛は机のうえでだらしなく眠り続けていた。

結局私達がやることになったのは紅茶とコーヒー、お茶を出す休憩所になった。

欄と二人でやるため、選択肢が少なく困つてるとき、過去の桜華祭で休憩所をやっていた人達がいたのでそれに工夫して、こう決まった。

問題は……。

「欄、あなた何もいれられないよね？」

「うん、でも鞄が教えてくれるなら、頑張つて覚えるよ！」

欄が飲み物をいれたことがないことだ。

一度だけ試しに作らせたが、身体の弱い子なら、体調を壊してしまいかねない味だった。

「時間ないから、本気でいくよ、今回は泣いても駄目だから、覚悟きめて頑張つてね、私も頑張るからね」

「う、うん、わかつたよ頑張る」

少し気後れしながらもしっかりと言つてくれた。

そして、桜華祭までの一ヶ月、各クラスと自分のクラスの準備を手伝いながら、欄に飲み物のいれ方を教えた。

とにかく忙しくあつというまに日にちがたつていった。

会長、副会長といっても、やれることはお手伝いだけ、だからこそ来年はこんなことにならないように、先輩の仕事を見せてもらい過去の桜華祭のデータをみて勉強したりした。そんなこんなで桜華祭の前日。

「欄……明日は頑張つて、運んでね……」
欄に一ヶ月で教えるのは無理だった。

「ごめんなさい……」
そして桜華祭は始まる。

第七章　桜花祭一日目

「これより第二十三回桜華祭を開催致します、学園生の皆さん、御来場頂きました皆さん、存分にお楽しみ下さい」

欄の御姉様の挨拶で始まった。

「さあ、鞆いこー」

そう言つて欄が私の腕を引いてあるきだす。

「はいはい、わかつたから引つ張らないで」

苦笑を漏らしながら、引かれるままに歩いていく。

私達の休憩所に。

始めに言つと全くの予定外だった。

なにがつて……。

「さ、さや…助けて〜！」

この込みようだ。

最初の三十分は誰も来ないで予想通りだった。

何を間違つたのか、そのあとから休む暇なく常にいっぱいいっばいだ。

休憩所にこんなにたまつてどうするのと言いたくなるくらい。

そんなことを考えながらも手だけは動かす。

「欄落ち着いてね、はいこのアップルティは手前のお客様、コー

ヒーは右のテーブルとその後ろね、慌てなくて大丈夫だから、頑張るっ」

自分のいっばいっばいの所は見せたくないから、笑顔で答える。

「う、うん、わかつた！行つてくる」

一日目は始終こんな調子だった。

「只今の時間を持ちまして、一日目の桜華祭を終了致します、御来場頂いた皆様有り難う御座います、また明日も是非、御来場お願い致します、生徒の皆さんはお疲れ様でした、明日も一日頑張りま

しょう」

欄の御姉様のその放送があつたあとまで私達の休憩所は込み合つていた。

見かねた、二年、三年の生徒会の人達が、本日はもう終わりなので…といって、帰すのを手伝ってくれなかったら、いつまでやっていたかわからない。

「本当に有り難う御座いました、ご迷惑お掛けして申し訳ございません」

全て終わったあと皆にそう言つて、一日目は終わった。

「鞘く疲れたー、私今日頑張つたから鞘と一緒に寝る」
私は何を行つても聞き入れず、部屋に戻つた瞬間ベッドに横になつて寝てしまった。

その寝顔は疲れているものの、凄く何かをやり遂げたといった満足そうとても可愛い寝顔だった。

私は、欄の頬にお疲れ様といつて、軽くキスをした。

欄は嬉しそうに、

「…えへへ」と笑つて、いい夢を見ているようだ。

そんな欄を見つめながらシャワーを浴びて、あたたかな欄を抱き締めて眠りに落ちた。

「……………」

私も何かとても嬉しくて幸せな夢を見ていたはずなんだけど、起きた時にはその感覚と気持ちだけが残つてるだけで内容を綺麗に忘れてしまつていた。

第八章　桜花祭二日目

「ん〜いい朝」

カーテンをあけた窓から飛び込んでくる、朝の日差しを浴びながら身体を伸ばす。

「……………全くこの子は」

私の視線の先には、身体を猫のように丸めて幸せそうに眠る欄が
いる。

苦笑を漏らしつつ優しく頬を撫でて、横にやられた布団をかけ直
す。

「朝食できるまでだよ」

そう耳元でささやくと、

「ん〜」と言う、微妙な返事が帰ってきた。

「ふふふ、欄ったら」

そして身支度を整え、朝食の準備を終わらせて欄を起こし、戦場
に向かった。

「……………いいじゃない、少し位大袈裟でも」

自分で考えた、戦場と言う例えが少し恥ずかしくて、思わず独り
言を呟いてしまった。

昨日の例があったので、今日は一人三十分までという決まりを作
った。

自意識過剰と言われるかもしれないが、備えだけはしておかない
と。

「鞘〜準備終わったよ〜」

「うん、解ったよ、ありがと〜」

そう返事をしながら、コーヒーの豆、紅茶の葉等の準備を済ませ
る。

「調子はどうかい〜?」

そう言いながら入ってきたのは、欄の御姉様二人だ。

「はい、なんとか準備は終わりました」

周りを確認しながらそう答え、コーヒーを出した。

「おっ、これが噂のコーヒーだね、すぐ出てきたけど、もう作り初めてたのかい?」

美味しいと言いながら、コーヒーを啜りながら、こちらに向き直る。

「人聞きの悪い、準備が整ったので、丁度一息入れるところだったんですよ」

欄と私もコーヒーを啜りながらそう答える。

「ははは、解ってるよ、にしても……」

軽く笑い、少し驚いたように欄を見る。

「コーヒー飲めるようになっていつなったんだ?」

「鞘が入れたもの以外は飲めないよ」

ふーふーと熱いコーヒーを冷ましながら、答えた。

「本当に鞘さんはすごいよね、私達じゃどんなに頑張っても無理な事を簡単にさせちゃうんだから」

今まで黙ってコーヒーを啜ってたもう一人の欄の御姉様が心の底から感心したといった感じで私の手を握った。

「!!御姉様何してるの、全く油断も隙もないんだから」

それを素早く関知した欄が驚くべき速さで間に入ってきた。

「いいじゃない〜私だって鞘の事好きなんだから、たまに少し位」

「駄目!」

嬉しいんだけど、こういった時どうしていいかが解らなくなる。

「全く面白いね二人とも、欄はともかく、いつも冷静で表情を崩すことのないあの子をあんなに人間らしくさせちゃうんだから」

「そう言いながら、私を抱きしめるのをやめてください」

溜め息をつきながらそう言つと、言い争っていた二人が今度はこっちに向かって慌てたようにやってくる。

こうして、二日目の桜花祭が始まった。

今日は予想通り昨日と同じく始終込み合っていた。

朝決めた新しい決まりが役に立ち、少し昨日よりは楽になった……
気がした。

結局欄は昨日と同じように、いっぱいいっぱいになり、最後はまた二年、三年の生徒会の人に助けてもらい、くたくたになって終わった。

今日はさすがに私も部屋につくたび欄が倒れ込んで、私のベッドに横になった。

「……や……や」

欄の声が何処か遠くから聞こえてきたが、答えることも出来ずそのまま眠りについた。

「鞘、鞘そのまんまだと起きたときこわいよ」

珍しい、というよりも初めてだ、こんな疲れきった鞘を見るのは寝顔も珍しい、何回かは見たことあるが、鞘が起こしても起きないなんて本当に初めてだった。

「でも、やっぱり鞘綺麗だなあ」

起こすのを諦め、寝顔を見ていたけど、思わずキスをしていた、それも唇に。

誰も見ていないというのに、周りを確認して、

自分の唇をふれる。

まだじんじんとした暖かさが残ってる。

「鞘、鞘は私の一番、命よりも大切な人、絶対に……絶対に離さないからね」

そう呟いて、鞘の胸の中で眠りに落ちた。

第九章　桜花祭最終日

今日で最後だ…そんなことを考えると何だか寂しいような、悲しいような気分になる。

「鞘、今日で最後だから頑張ろうね！」

欄の声を聴いて我にかえる。

そうだ、そんな感傷を覚えるのは終わった後でも遅くない、今は最終日の今日を精一杯やりきることを考えよう。

「欄ありがとう…うん、今日で最後なんだから精一杯頑張ろうね」

少し不思議そうな顔をしたが、そんなのは一瞬ですぐに笑顔で

「うん！」という返事が返ってきた。

そして二人で学園へ向かって歩き出した。

「ご来園頂いた皆様有り難うございます、桜花祭三日目、最終日存分にお楽しみ下さい」

欄の御姉様の挨拶が終わると同時にいろんな人が学園に入ってくる。

他校の学生、生徒達の父兄や一般の来客。

沢山の人達だ。

もともと人混みが苦手な私は、人通りの少ない所に逃げ込んだ。

「凄い人の数だね」

手を引いて連れてきた欄がそう言っただけで私の隣に並ぶ。

「本当にね、どうしても人混みには慣れないわ」

疲れたようにそう言うと、相変わらずだねと欄が笑う。

私も釣られて本当よねと笑ってしまった。

今私達は学園の中を見て回っていた。

何故か…欄の御姉様二人が、数人の生徒を連れて休憩所に来たことから、今の状態になった。

「今日で最後だけど、桜花祭はたのしんだかな？」

おはようと挨拶をしながら、欄の御姉様達と数人の生徒が休憩所に入ってきた。

「ええ、楽しませてもらっていますよ」

私がそう言っていると、やっぱりといった感じで苦笑しながら欄の御姉様がいった。

「鞆ならそう言うとは思ってたけどね、でも少しは外の祭りを見て回らないと本当に楽しんだ事にはならないと思うんだ、だから今日はこの子達にここを任せて、遊んできなさい」

私がかいつ前に、欄が突然前に出た。

「嫌、鞆と私のこの休憩所は最後までしっかり自分達でやりおきたいの、だから嫌」

少し驚いたけどそれ以上に、自分と同じ考えでいてくれた欄が嬉しくて思わず後ろから抱きしめてしまった。

「はい、そう言うことなので、折角のご好意は有り難いのですが、遠慮させていただきます」

そう言って、欄の御姉様を見ると、物凄く驚いた顔をしていた。

しばらくたつても動かなかつたので、大丈夫ですかと声をかけると、ようやく我にかえって話し出した。

「あ、ああごめんね、鞆がそう言うとは思ってたけど、欄がこんなこというなんて想像も出来なかつたから少し驚いてしまったよ、そんな責任感、やる気を見せるなんて凄く嬉しかったから、言うとおりにさせてあげたいけど、生徒会として、一度も桜花祭をお客として楽しまないと言うのは許可出来ない」

私が反論しようとするのをのりだした瞬間、それを制するように、また欄の御姉様が話し出した。

「だから！午前中だけでも遊んできなさい、そして午後から最後まで思うとおりやるといいよ」

最初から最後までやりたいと言おうとしたが、欄の御姉様の顔を見ると何も言えなくなってしまうた。

「はい、わかりました」

だから、私はそう言うしかなかった。
多分欄も同じだろう。

あの顔は卑怯だと思う。

だって、凄く嬉しそうで幸せだって顔して私達を見るんだから。

こうして私達は今午前中だけお客として桜花祭を楽しんでいた。

屋台でたこ焼きや焼きそば、綿あめ など定番の品々を食べ、いろんな手作り品の店を見て回った。

悔しいけど欄の御姉様の言う通り凄く楽しい。

こうやってお客として遊び、自分達の仕事を精一杯やってこそ、本当にこの桜花祭を楽しんだことになるだろう。

存分に桜花祭をお客として楽しみ、そして自分達の休憩所に戻ってきた。

お昼まで開けませんといった張り紙をしているにも関わらず、かなりの人数の人数の人が休憩所の前に集まっていた。

私達はお互い嬉しそうな顔をしていたと思う。

私達をこんなに沢山の人が待っていてくれたんだから。

御待たせしてごめんなさいと二人で謝りながら、休憩所の扉を開けた。

凄く忙しかった。

でも今日は疲れなんて感じない、欄も同じ見たいで、昨日までよ
り生き生きと動いていた。

こうして、私達の桜花祭は終わった。

私達は……凄く楽しんだ。

パチパチつと外から音が響いてくる。

桜花祭で使ったものを燃やしているのだ。

その周りでは、その持ち主であった生徒達が困んでいた。

そんな風景を私と欄は自分達の休憩所があった所から肩を寄せあ

って二人で見ている。

今にも泣いてしまいそうな程に悲しくて寂しい気分なのだ。

多分欄がいなければ私は泣いていたかもしれない、嫌きつと泣いていた。

欄はすでに涙を目の縁に貯めて泣くのをギリギリの所で我慢している。

私はそんな気分を吹き飛ばすように、かくしてあった、手作りの店で買った可愛い銀細工の指輪を欄につけてあげた。

「鞘……」

欄が驚いた表情でその指輪を見ると、クスツと笑いがこぼれ落ちた。

そして欄はポケットの中から、私があげた指輪と同じものを取り出した。

「私も可愛いなあって思ってたに鞘に買ってきてたんだ」

そう言って私に指輪をつけてくれた。

寂しい気持ちはまだ残っていたけど、それ以上に欄と私が同じことを考え、同じことをしていた事が暖かい気持ちにさせてくれた。

だからさつきまでの泣きそうな雰囲気はなくなり、二人で嬉しくて笑いあった。

こうして私達の桜花祭が終わった。

ちなみにあとから聞いたことなんだけど、私達の休憩所があんなに込んだのは、欄の御姉様達がいると手を回したからだだった。

ごめんねと謝られたけど、私達は笑いながら逆にお礼をいった。

参ったなあといった感じで苦笑する御姉様達を見ると少し、してやった見たいな気分になった。

でもお礼をいった気分は本当なので、だからこそその反応なんだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3934e/>

桜と二人

2010年10月10日04時33分発行